



3月10日 前日は雪が降り 朝日に校舎が美しく照らされていた

3月10日、朝日に映えた校舎が浮かび上がっている。雄勝中学校最後の雄姿である。

1 地震発生直後の状況

3月11日、当日は卒業式であった。心を込めて創り上げた卒業式が終わり、保護者と共に体育館で集合写真を撮ったのが午後1時。この1時間46分後に地震が発生する。この写真に移っている保護者には亡くなられた方もいる。



卒業式記念撮影・・・この2時間数分後、この体育館はすべてが流された



2時46分 この時を境にすべてが一変した（職員室前廊下）

感動の卒業式を終えた卒業生と在校生は、全員午後1時40分頃には下校していた。その後、職員は遅い昼食をとり、体育館の片付けをした。

2時30分頃には、全員が職員室に戻った。小休止をとっているところに地震が発生した。

全員が校庭に飛び出す形で避難したが、校庭は地面が裂け、校舎は崩壊するのではないかとされるくらいその揺れ方はすさまじかった。長い揺れがおさまりに、校舎に入ったが、全てが散乱して足の踏み場もなかった。「次は津波が来る」と直感した我々は、「森林公園へ行こう」と呼びかけながら、それぞれが車に乗り（女性3人は自分の車ではなく他に乗車）避難を開始した。

その頃には、「大津波警報発令」のサイレンがけたたましく、町中に響いていた。

（普段から、生徒がいた場合は、3階か屋上、もしくは山へ誘導避難し、生徒がいない場合は、車で森林公園へ避難しようとシミュレーションはしていた。そのことが、今回のとっさの判断に繋がったものと思われる。）

私たちは、一度山側とは逆方向の海側に向かい、大原川にかかる橋を渡ることになる。今考えるとこの小さな橋が落ちていたら職員もどうなっていたか分からない。

雄勝には一本の道路が町を縦断している。多くの住民がこの道路を避難してくると思われたが、渋滞することも無く、途中、落石等避けながら森林公園まで向かうことができた。この際、2人の職員が、家族の安否確認のため私たちと別れた。(内、1名の職員が自宅ごと津波に流され亡くなる)

教員が避難した森林公園には、住民の方々より最初に到着する。その後、生徒たちも



山の中へ避難 おにぎりをもらう 長く寒い夜が続く

避難してきて、13名を確認した。他の生徒はそれぞれの違う場所に避難した。森林公園へ避難した生徒たちは体一つで逃げてきているため、職員が服や靴を分けあたえたりした。寒い夜をどう越えていけるかが大きな問題だった。灯りがなく星がきれいで、生徒たちと一緒に眺めたりもした。

炊き出しのおにぎりは、一日1個か2個の配分しかなく、教員の分は全部子どもたちに分け与

た。

2 津波による被害状況

午後3時25分 津波が地域・校舎を襲う



体育館は 入り口の階段だけが残った



15時25分 校舎の屋上を津波が越え すべてが廃墟と化す



校舎裏側 様々なものが流されてきて突き刺さっている

卒業式を行った体育館は跡形もなく流されてしまい、階段だけが残った。(写真左)

校舎正面側。時計がねじ曲がっており、津波が屋上を越えていることがわかる。(写真中央)

学校の裏側。様々なものが学校に突き刺さっている。(写真右)



校舎の脇に体育館の残骸と思われるものが・・・卒業式の紅白幕がみえる



職員室



左側に部室の一部が見える 周囲は足を踏み入れることもできない

校舎の端の方に体育館の残骸が。卒業式で使った紅白の幕が引っかかっている。(写真左)
職員室。(写真中央)

部室周辺。周りは足の踏み場もない。(写真右)



校舎遺景 地域は壊滅し校舎の外枠だけがむなしく浮かび上がっている



雄勝の町は一瞬にして姿を変えた

遠くから見ると、学校の枠だけが残っている。(写真左)
雄勝の町は壊滅した。(写真右)

3 生徒の安否確認と学校再開まで



手書きの名簿で安否確認

全てのものが流されたので、生徒の安否確認をするために、手書きの名簿を作成した。

(1) 避難場所を脱出

私たちは、11日の夜を避難した場所（森林公園）で生徒たちと一緒に過ごすことになる。しかし、石巻市街地に自宅がある職員は、自分の家も地震や津波によって大きな被害を受けたことや家族の安否を心配しているので、12日朝に危険な峠を越えて帰すこととした。2日目も残った校長、教頭、3学年学級担任、養護教諭が、生徒の健康観察や安否確認のための情報収集を行った。この日には学校の裏山に避難していた雄勝小学校の職員が子どもたちを誘導して森林公園にやってきた。この小学生のために、中学生らがキャンプ用テントを設営するなどの働きを見せた。

この段階で、様々な情報と状況からもうここには生徒が避難してくることはない判断をした。

したがって、ここでは全雄勝中学生の安否確認や避難状況の把握ができないということで、残った4人も3日目の朝に山を出て雄勝の地区を出ることにした。共に避難したPTA会長に生徒を預けての苦渋の決断であった。

離れるその朝、現状を記録しようと、被災地日に降り、町や中学校の様子を写真に納めた。真野峠越えは、普段は30分程度であるが、雪や崩落の影響で5時間を要した。

(2) 仮設の職員室を設置



仮設職員室の設置 ここから再生に向けて踏み出す

全職員が峠を越えた後、ガソリンが手に入らず、今度は雄勝地区に戻れなくなる事態が生じた。安否確認が頓挫してあせったがなすすべがなかった。しかし、このような状況の中で1人の女性職員が、自宅が全壊流出したにもかかわらず、20キロも離れた避難場所から自転車で真野峠まで通い、3日間も雄勝地区に安否確認のために入り続けたのである。その結果、雄勝の地区に本校教員がいなかった日はなかったことになる。(このことは、後々保護者や地域の方からの信頼を得ることにつながっていく。)

こういった状況の中で、拠点を作らないと安否確認が進まないと判断した。そこで周囲の施設に雄勝の地区の人が多く避難してきている飯野川中の一室を借りて仮職員室を設置した。



避難所をまわり子ども安否確認する教員たち

職員は、ガソリンがない中何時間もかかって、危険な峠を越え現地に入って安否確認をしていく。

(3) 全員の無事確認



3月19日19時6分 奇跡だ！ 全員の無事確認

3月19日19時06分。全員の安否が確認。避難所が十数カ所に分かれていたため、確認に8日を要した。

すさまじい惨状の中、それぞれがバラバラに逃げていながら全員が助かった。まさに奇跡である。校長としては、前の日まで眠れない日々が続いたが、この日も、逆に興奮して眠れなかった。全員が無事だったという喜びと、これから雄勝の学校をどう再開していくかという思いで、全く眠れなかったのを覚えている。

(4) 「雄中の日」の制定、集合日の実施



集合日 元気に走るサッカー部員たち

全員の生存が確認できた翌日の3月20日を再生に向けて「雄中の日」として制定することとした。全員が奇跡的に無事であったこと、新たなスタートの日だということをいつまでも忘れないために。



感動の離任式（思いを残して）

22日には生徒全員を集めてみた。ガソリンもない、道路も寸断されている中であつたが、初めての集合日は33名の生徒が集まってきた。本来なら修了式となる24日にも集めた。そこからは、毎週木曜日を集合日とした。子どもたちにも保護者にとっても負担かなと思われたが、週1回みんなで集り、体をうごかしめしたりプリント学習をし

たりして過ごすことは、心のケアにつながるだろうと考え実行した。

離任式も実施した。保護者を含めて100人を越えたこの離任式は、実に感動的な、雄勝中らしい集会になった。この時に「これからも雄勝中学校で生活を送りたい」と決意したと言ってくれた子どもたちや保護者も多くいた。このことが、その後の職員の大きな励みとなる。



集合日の炊き出し（うどん）

体一つで何も持たずに逃げた生徒のため、集合日にはみんなで炊き出しをした。当時は炊き出し道具も手に入らず、宮教大附属中学校に鍋と薪ストーブを借りに入ったら、「すきなだけ持っていっていい」と言われた。この時の感謝の気持ちは忘れない。

（5）再開に向けて



支援物資が次々と送られてくる

仮設職員室にはたくさんの支援物資が送られてくる。流された校旗も、離れたところから見つかった。今も津波の泥のついたままの状況で飾っている。まさしく復興のシンボルである。



雄勝中最強スタッフ（引越しの日：仮設職員室最後の一枚）

スタッフ。生徒たちが十数カ所に散って避難し、そこに通い続けて連絡を取り合ってきた。学校によって状況が違うが、全力で、安否確認、物資収集、心のケアと対応し続けた雄勝中の教員を私は誇りに思う。

4 学校再開にあたって

学校を再開するにあたり、単なる再生ではなく新生雄中を目指し、まず校訓を代えた。新たな学校教育目標も設定した。さらに、組織や分掌のあり方も検討した。

新生「雄勝中」を目指して

- ・ **新たな校訓の設置**
- ・ **新たな学校教育目標の設定**
- ・ **組織、分掌の在り方の試行**
ゼロからのスタート

- 例
- 職員会議の在り方（新たな形）
 - 研究推進の凍結（大きな視点で）
 - 特設分掌の設定（臨機応変）

地域や学校を失い、全てをなくしたため、新たな学校づくりを始める覚悟で取り組むことを職員と確認した。

これまで学校教育は、あれもやらなければならない、これもやらなければならないという贅肉をいっぱいつけてきた。本校では「これは本当に必要なのか」とこれまであった当たり前の組織や行事に疑問と課題意識を持ちながら検討し踏襲はしないこととした。も

ちろんこれまでと同様の事ができる環境ではない。

これまで月に1度の職員会議の在り方をやめ、生徒指導関係は毎朝の打ち合わせで行い、行事等や新提案についての協議は週に1回のミーティングで行うこととした。

研究会も今年度は凍結した。去年までは、学力向上のための研究を中心に推進してきたが、今は、それらの時間があつたら少しでも子どもの側に寄り添うことが最優先だと判断した。新たな学校づくりという意味では、大きな研究をしているとの共通認識をもった。

さらに、特設分掌を設置した。支援物資担当主任、復興主任等とか現状に対応できるものとした。本校独自のものとしては、太鼓主任も置いた。これまでの細分化、複雑化した分掌ではなく、大幅に整理し最小限の分掌で学校運営を試行し、学校教育そのものを見直していく、教育の原点に立つ、そういった視点で一年間取り組むこととした。

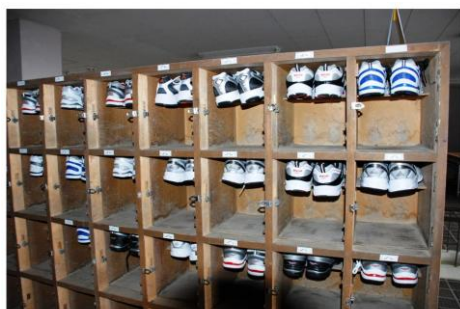
(1) 職員室経営



飯野川校視聴覚室に職員室をつくるスタッフたち

子どもたちの支援物資を集めたが、職員室や学級経営のためのグッズが全くないということに気がつく。チョーク1本、画鋏一個から、また集め始める。

(2) 全てをそろえてあげたい・・・全員の履きを準備



下駄箱に全員の靴が（職員の方の努力の跡）

子どもたちは体ひとつで逃げたので何も無い。そのため、職員が自分たちのつてをたどり上靴をサイズ別に揃えた。この頃には職員は子どもたちの靴のサイズや体のサイズ、頭のサイズを押さえていた。学校に来たら、自分の足に合った大きさの靴が下駄箱に入っている、こうして子どもたちを迎え入れる、そのような準備をした職員に心から感謝でしたい。

(3) 学校生活スタート



新たな校訓を宣言（入学式にて）



年中 family 勢揃い

校訓を代えた。「たくましく生きよ。」

入学式。全員私服だったのは石巻地区で本校だけであった。

生徒たちの心の中には、家や肉親を亡くし、すさまじい惨状を見て、いくつもの寒くて長い夜を越してきたことにより、多くの哀しみや怒りが沈殿していると思われる。これから、すこしずつ日常が戻ってきた中で、表出してくるものと思われる。

本校では、前教頭が残した「哀しみや怒りを喜びや楽しいことで包んでしまおう」という言葉を、今年1年の心のケアの在り方としよう、多くのイベントを実施していくことになる。



小中合同での花見（すいとん汁を食べながら）

(4) 給食問題



簡易給食（えっ これだけ?）

ようやく学校が再開して、一番驚いたのが給食である。最初は物資が足りなかったのがその準備に奔走したが、いざ給食が再開されると写真のような状況である。給食は簡易給食でやむを得ないとも思っていたが、これで中学生が一日活動するのはとても無理である。いくら被災したとはいえ、これしか中学生に食べさせられないのか。「大変な思いをした子どもたちに



給食時に汁物を準備

ひもじい思いはさせたくない。」という強い気持ちを共有し、何とか自分たちで炊き出しをしようと、毎日の空き時間を利用して準備をした。しかし、これは大変な労力を必要とし、さすがの職員も疲労困憊であった。

その後、この現状を知った、仙台青年会議所の皆さんやボランティアの皆さんが支援に入ってくることになる。

「食べる」という「生きる」ことの原点が、保証されな

い。そのことは、大きな課題である。この日本の社会において、成長期の子どもたちに十分な栄養をとらせることができない。この実情は今も少なからず続いている。

(5) 多くの方から支援をいただく



多くの方から心にエネルギーを

著名人の方々を始め、多くの方が来校し、音楽コンサートや出前授業などで、生徒たちと関わっていただいた。

避難所暮らしが続く中、萎えた心に元気をいただいた。この時の支援は心のケアの面で本当に大きな意味があり、生徒たちは、多くの人との出会いの中で徐々に癒やされていくことになる。



再生から新生に向けてスタート

制服も支援され、いよいよ再生から新生に向けて動き出す。(5月20日雄中の日制服を着る会)

5 震災後からの動き・・・2本の柱

震災後からの動きを、段階的に考え、見通しを思ってもって計画的な学校運営を心掛けた。3月11日から4月21日までの学校が再開するまでの40日間を怒濤と奔走期、6月まで、人の力をいっぱい借りて、エネルギーをもらった時期を他力再生期、またそこからは自力で再生を目指す時期とした。心のケアは3年とか10年かかると言われるが、3年生はあと9ヶ月で卒業していく。その3年生と接することのできる9ヶ月間の期間の中で、

震災後からの動き

<3月11日～4月20日>
怒濤・奔走期 対応のスピード、タイムリー
<4月21日～6月>
他力再生期 他からのエネルギーの享受
<7月～>
自力再生期 自ら未来に向けて歩み出す



雄勝復興太鼓 「たく塾」開塾

子どもたちとどうかかわっていくのが問われていると考えた。

その、自力再生の本校での取り組みの柱を2本打ち立てた

その一つが雄勝復興輪太鼓、そしてもう一つが学力保証のための「たく塾」の開塾である。(校訓「たくましく生きよ」から命名)

(1) 雄勝復興輪太鼓

雄勝には「伊達の黒船太鼓」という伝統の太鼓がある。これまで総合の時間で10数名が取り組んでいた。しかしこの太鼓は全て流された。これを全校生徒51人で取り組むこととした。太鼓の活動を通して、生きていることの証や喜び、感謝の気持ち、地域の方々と一緒にがんばろうという思いを伝えるために。



雄中生全員で「雄勝復興太鼓」を



手作り輪(タイヤ)太鼓



雄中生全員で「輪太鼓づくり」

太鼓は買えないので、古タイヤに荷造り用のテープを張って太鼓とし、台も手作りした。パチは100円ショップの麺棒を代用した。



雄勝中復興輪太鼓練習風景



夏休み中、「たく塾」の最後に毎日練習。輪太鼓も進化し、それぞれが自分の思いを込めて太鼓をたたく。(写真左)

夢の東京駅での演奏。支援していただいた多くの方に感謝の気持ちを伝える。(写真右)
この演奏を機にドイツでの演奏の招待を受ける。

(2) 「たく塾」開塾

「たく塾」を夏休み中に開くこととした。3年生にとっては、避難所や仮設住宅は学習環境が非常によくないため、受験勉強する場がなく進路に関する大きな不安を抱えている。

1, 2年生にとっても家もなく、地域もないので学校で過ごすのが最善と考えた。

「たく塾」は、3年生には、塾の講師の方をボランティアより毎日4コマの授業、1, 2年生は学生ボランティアにより、午前中は部活動、午後は2コマの授業を行った。

さらに、ほぼ、一日中学校で過ごす生徒たちにとって毎日の昼食が必要となる。

このための支援も多くの方からいただいた。この「たく塾」が軌道に乗り始めた頃には、職員も休養をとる時間が確保できるようになった。

雄中サマースクール 「たく塾」開塾

背景

- 1 不十分な家庭学習環境(避難所暮らし)
- 2 学力の保証は心のケア
- 3 経済的負担の軽減(夏期講習代等)
- 4 家、地域のなくなった生徒への居場所の提供



学生ボランティアによる「たく塾」風景

この「たく塾」はその後、11月から毎週金曜日の午後と土曜日の午前中、さらには毎日の放課後と拡大、発展していくことになる。